View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Prometheus-Academic Collections

思言 東京外国語大学記述言語学論集 第 10 号 (2014)

ニヴフ語の名詞化について*

蔡 熙鏡
（東京外国語大学大学院博士後期課程/日本学術振興会特別研究員）

キーワード：ニヴフ語，名詞化，脱/再範疇化，間接疑問表現

1. はじめに

ニヴフ語の名詞化には、二つの方法がある。その一つは動詞語幹に名詞派生接尾辞の*-s* ~ *-r*^{h}、*-f*、*-k* を付加する方法であり、もう一つは直説法の動詞形式 *-d*^{j} をそのまま項として用いる方法である (Panfilov 1962: 41-50, 64-67)。名詞化に関する類型論的な研究は、諸研究者によって数多く行われてきたが、中でも Malchukov (2006) は、名詞化には動詞らしさを失っていく脱範疇化と名詞らしさを獲得していく再範疇化の 2 つのプロセスが関わっていることを指摘している。

本稿では、まず Malchukov (2006) の枠組みを用いて、ニヴフ語の名詞化に伴う脱範疇化と再範疇化の程度を検証する。次に、名詞化の周辺的な問題として、ニヴフ語の間接疑問表現をとりあげる。

なお、本稿で用いるデータには、筆者がサハリン州ノグリキ地方で行った現地調査で得られた資料と丹菊・パクリナ (2008) のテキスト集 (以上、東サハリン方言)、そして Nedjalkov & Otaina (2013) と Panfilov (1962) の文法書の例文 (以上、アムール方言) が含まれる。テキスト集や文法書からの例には出典を示してある。

2. ニヴフ語の概要

ニヴフ語は、ロシアのアムール川下流域およびサハリン島の一部地域で話されている系統関係の不明な言語である。方言は、大きくアムール方言グループとサハリン方言グループに分けることができ、それぞれの方言グループは大陸アムール方言、西サハリン方言、北サハリン (シュミット) 方言 (以上、アムール方言グループ) と東サハリン方言、南東サハリン (ポロナイスク) 方言 (以上、サハリン方言グループ) の下位方言に分かれる (Shiraishi 2010: 20-22)[1]。ロシアの 2010 年国勢調査のデータによると、ニヴフ民族の人口は 4,562 人であり、そのうちニヴフ語が分かると答えた人は 198 人であるという[2]。

類型論的な特徴としては、SV/AOV の基本語順、膠着的で総合的 (synthetic) な形態論を示すことなどがあげられる。以下では、2.1. 節でニヴフ語の名詞と動詞の基本的な構造について、2.2. 節でニヴフ語のいわゆる統語的な複合体について、2.3. 節でニヴフ語の名詞化の概要を簡潔に示す。

---

*本稿は、2014 年 6 月に開催された日本言語学会第 148 回大会のワークショップ「名詞化とその周辺に存在する諸問題－Malchukov (2006) の枠組みをもとにして－」での発表内容を加筆修正したものである。

[1] 本稿では方言差による結果への影響は少ないと考え、考慮に入れていない。

[2] http://www.gks.ru/free_doc/new_site/perepis2010/croc/perepis_itogi1612.htm (最終閲覧日 2014/09/07)。

2.1. 名詞と動詞の基本構造

ニヴフ語の名詞の基本的な構造は (1) のように示すことができる。

(1)　名詞の基本構造

POSSESSOR－ROOT－NUMBER－CASE

ɲ-ətk-xun-aχ

1.POSS-father-PL-CAUSEE

「私のお父さんたち (お父さんとその仲間たち) に」

所有者が単数形の人称代名詞、再帰代名詞である場合は、表 1 のそれぞれの縮約形式が所有物名詞に付加される。一方、複数形の人称代名詞や名詞の場合は、語根の前に置かれて、所有物名詞と統語的な複合体 (2.2. 節を参照) を形成する。

表 1: 人称代名詞と再帰代名詞 (東サハリン方言)

	代名詞 (単数)	縮約形式
一人称	*ɲi*	*ɲ-*
二人称	*cʰi*	*cʰ-*
三人称	*jaŋ*	*j-*
再帰	*pʰi*	*pʰ-*

数には単数と複数があり、複数はいわゆる近似複数の意味を表し得る。但し、複数標示は義務的なものではない。格は、東サハリン方言において、8 種類が認められる。すなわち、絶対格 (*-ø*)、呼格 (*-a*)、与格 (*-roχ/-toχ/-doχ*)、具格 (*-ɣir/-kir/-gir*)、場所格 (*-ux*)、被使役者格 (*-aχ*)、比較格 (*-ak*)、到達格 (*-roɣo/-toɣo/-doɣo*) である。絶対格名詞は主語、目的語、所有構造における所有者の統語位置などを占める。

次に、動詞の基本的な構造は (2) のとおりである。語根と法 (MOOD) 接尾辞は必須要素である。

(2)　動詞の基本構造 (他動詞)

UNDERGOER－ROOT－ASPECT－CAUSATIVE－ASPECT/TENSE－MODAL－NEGATIVE－MOOD－NUMBER－FOCUS

動詞の直説法は、名詞の複数標識と同じ形式をとって、主語の数に任意的な一致を示すことがある。他動詞の UNDERGOER は表 1 の縮約形式、もしくは代名詞、名詞のどれかによって標示される。テンスには未来/非未来があり、ムードには直説法と命令法がある。一部の副動詞接尾辞や命令法の接尾辞は主語の数に義務的な一致を示す。そして、疑問や不確かさ、否定などを表す焦点の標識が最後のスロットにくる。

2.2. 統語的な複合体

ニヴフ語の特徴的な現象の一つに、ある形態・統語的な環境において、形態素境界の後部要素の頭子音が交替する現象がある。Shiraishi (2010: 81-84) によると、頭子音交替には二つのプロセスがある。一つ目は、前部要素の末音が母音、わたり音、破裂音の場合、後部要素の破裂頭子音が対応する摩擦音に変わるというものである。二つ目は、前部要素の末音が摩擦音、鼻音の場合、後部要素の摩擦頭子音が対応する破裂音に変わるプロセスである。

(3) 頭子音交替のプロセス (Shiraishi 2010: 84)

	入力		出力
a.	母音 - 破裂音	＞	母音 - 摩擦音
b.	わたり音 - 破裂音	＞	わたり音 - 摩擦音
c.	破裂音 - 破裂音	＞	破裂音 - 摩擦音
d.	摩擦音 - 摩擦音	＞	摩擦音 - 破裂音
e.	鼻音 - 摩擦音	＞	鼻音 - 破裂音

頭子音交替は、一部の接尾辞にも見られるが、二つの語幹境界で起こる頭子音交替は、次の (4) の統語環境に制限される。

(4) 頭子音交替が起こる統語環境

a. 修飾名詞－主要部名詞 (または、所有者－所有物; NOUN－NOUN)

b. 連体修飾－主要部名詞 (VERB－NOUN)

c. 目的語－述語 (NOUN－VERB)

一方、主語－述語、主語－目的語の間で頭子音交替が起こることはない。但し、上記 (4) の統語環境であっても、間に副詞などの別の要素や休止が置かれる場合は、頭子音交替は起こらない。Nedjalkov & Otaina (2013: 9) は、頭子音交替を引き起こすこのような構成を統語的な複合体 (syntactic complexes) と呼んでいる。以下に、例を示す[3]。

(5) 統語的な複合体

a. NOUN + NOUN

*qan+**z**oŋr*^{h} (< ***c**oŋr*^{h}) [dog+head] 「犬の頭」

b. VERB + NOUN

*hoɲʁ+**r**af* (< ***t**af*)[4] [become.empty+house] 「空っぽになった家」

c. NOUN + VERB

*tamx+**t**a-* (< ***r**a-*) [tobacco+smoke] 「タバコを吸う」

[3] 本稿では、統語的な複合体であることを表すために、Nedjalkov & Otaina (2013) に倣い、“＋” 記号を用いることにする。

[4] ニヴフ語における /r/ の音素は、その音韻形態論的なふるまいから摩擦音として扱われる。

2.3. ニヴフ語の名詞化

ニヴフ語の名詞化には、動詞語幹に名詞派生接尾辞を付加する形態論的なプロセスと直説法の動詞形式[5] をそのまま項として用いる方法がある。両方とも新しい語彙を派生する力を持っており、以下に示すような例はニヴフ－ロシア語辞書である Savel'eva i Taksami (1970) に見出し語として登録されている。

(6) Panfilov (1962: 41-51)

vutʲi-	「掃く」	＞	*putʲi-**s***[6]	「箒」
ʁov-	「汲む・すくう」	＞	*qov-**s***	「ひしゃく」
qʰo-	「寝る」	＞	*qʰo-**f***	「寝場所」
ŋarʁo-	「罠を仕掛ける」	＞	*ŋarʁo-**f***	「罠を仕掛ける場所」
həjm-	「老いる」	＞	*həjm-**k***	「老人」
polm-	「くらむ」	＞	*polm-**k***	「盲人」

(7) Nedjalkov & Otaina (2013: 69)

a. *if* *nəmr* ***ŋarʁo-dʲ.***
s/he yesterday set.trap-IND
「彼は昨日罠を仕掛けた」

b. *if* *pʰ-**ŋarʁo-dʲ**+vo-dʲ.*
s/he REFL-set.trap-Dʲ+take-IND
「彼は自分の罠をとった」

それぞれの接尾辞によって派生された語は、様々な意味を持ち得るが、*-s* は主に道具の意味を表し、節を名詞化することはない。*-k* は主に行為者の意味を、*-f* はほとんどが場所の意味を表し、語彙的な名詞化と節の名詞化の両方に用いられる。*-dʲ* が (7b) のように新しい語彙を派生することは少なく、多くの場合は節の名詞化に用いられ、出来事の意味を表す。

Nedjalkov & Otaina (2013: 64) は、*-f*、*-k*、*-dʲ* によって名詞化された動詞は、テンス、アスペクト、結合価の動詞カテゴリを保持すると述べているものの、それぞれの接尾辞の名詞化の度合に関する記述は見られない。次の 3 節では、接尾辞 *-f*、*-k*、*-dʲ* による名詞化の際に失われる動詞カテゴリと新たに獲得する名詞カテゴリを Malchukov (2006) の階層に当てはめて、接尾辞間の違いを検討する。

3. 脱範疇化と再範疇化

Malchukov (2006) は、名詞化には動詞らしさを失っていく脱範疇化と名詞らしさを獲得していく再範疇化の 2 つの独立したプロセスが関わっており、脱範疇化と再範疇化には次

[5] Mattissen (2003: 21) は、直説法の接尾辞 *-dʲ* は名詞化接尾辞に由来するものであり、名詞と動詞の両方の性質を持つと述べている。

[6] 摩擦音で始まる他動詞が名詞化される場合は、その子音は、普通対応する閉鎖音に変わる (Kejnovich 1937: 52)

のような階層性が認められると述べている[7]。

(ⅰ) 動詞からの脱範疇化: VALENCY >> VOICE >> ASPECT >> TENSE >> MOOD >> AGR$_S$ >> IF
(ⅱ) 名詞への再範疇化: CASE >> DET >> POS >> NB >> CL

つまり、動詞が名詞化する際、動詞らしさは (ⅰ) の階層の右側から順に失われ、名詞らしさは (ⅱ) の階層の左側から順に獲得していくというものである。

2.1. 節で見たように、ニヴフ語の動詞カテゴリには、VALENCY、VOICE、ASPECT、TENSE、MOOD、AGR$_S$、IF があり、名詞カテゴリには POS、NB、CASE がある。以下では、*-f*、*-k*、*-dʲ* による名詞化の度合を順に見ていく。

3.1. *-f* 名詞化

-f 名詞化による脱範疇化と再範疇化の程度を以下に示す。

(8) *-f* 名詞化の脱範疇化と再範疇化

VALENCY >> VOICE >> ASPECT >> TENSE >> MOOD >> AGR$_S$ >> IF
脱範疇化 >>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>
CASE >> POS >> NB
再範疇化 >>>>>>>

(8) に見るように、*-f* による名詞化は VALENCY から TENSE までの動詞カテゴリを保持し、CASE の名詞カテゴリを獲得している。POS と NB の名詞カテゴリが標示されている例は見られない。

(9) Nedjalkov & Otaina (2013: 74)
cʰi *cʰo+ŋəŋ-**nə-f-toχ*** *ɲi* *pʰrə-nə-dʲ-ra.*
you.SG fish+look.for-FUT-NMLZ-DAT I come-FUT-IND-FOC
「私はあなたが魚を獲る場所に来ます」

(10) *tu+cʰχarʰ* *aχ* *pol-**inə-f**-pərʰk* *ha-d.*
this+tree soon fall-DES/INCH-NMLZ-only be.so-IND
「この木は今にも倒れそうだ」

(11) 丹菊・パクリナ (2008: 28)
jaŋ *əcʰx+kʰe-**gu**-jnə-f-parʰk* *ha-d-furu.*
s/he husband+take-CAUS-DES/INCH-NMLZ-only be.so-IND-HS
「彼女は (連れてきた女の子を) 結婚させようとしたそうだ」

[7] AGR$_S$ は subject agreement、IF は illocutionary force marker、DET は determiner、POS は possessive、NB は number、CL は classifier をそれぞれ表す。

(9) は TENSE の動詞カテゴリを保持しつつ、CASE の名詞カテゴリを獲得している例であり、(10) は ASPECT、(11) は VOICE の動詞カテゴリを保持している例である[8]。*-f* の特徴としては、非常に生産性が高いことがあげられる。*-f* 名詞化は会話の中で、自由に場所を表す名前を派生することができ、事実上すべての動詞に付加され得る (Panfilov 1962: 45, Nedjalkov & Otaina 2013: 73)。

3.2. *-k* 名詞化

-k による名詞化の脱範疇化と再範疇化の度合を以下に示す。

(12)　*-k* 名詞化の脱範疇化と再範疇化

VALENCY >> VOICE >> ASPECT >> TENSE >> MOOD >> AGR_S >> IF

脱範疇化　>>>>>>>>>>　　>>>>>>>>>>>>>>>

CASE >> POS >> NB

再範疇化　>>>>>>>>>>>>>>>

-k の場合は、VALENCY と ASPECT、TENSE の動詞カテゴリを保持し、すべての名詞カテゴリを獲得している。

(13)　Nedjalkov & Otaina (2013: 70)

cʰi-la　　*seta+ɣe-**nə**-k*?

you.SG-Q　sugar+take-FUT-NMLZ

「砂糖を買う人はあなたですか？」

(14)　丹菊・パクリナ (2008: 18)

hud　*voci-jo-**ʁarʰ**-k.*

that　resemble-DIMN-PFV-NMLZ

「それはよく似たものだ」

(15)　Nedjalkov & Otaina (2013: 64)

ɲi　*nəmr*　　*seta+ɣe-k-**roχ***　　*vi-dʲ.*

I　yesterday　sugar+take-NMLZ-DAT　go-IND

「私は昨日砂糖を買った人のところに行った」

(16)　Nedjalkov & Otaina (2013: 285)

hemar　*als+tʰo-k-**xu**+al-dʲ.*

old.man　berry+carry-NMLZ-PL+catch.up-IND

「老人はベリーを運ぶ人たちに追いついた」

---

[8] 例 (10)、(11) の接尾辞 *-inə-* ~ *-jnə-* ~ *-ijnə-* は、変化の初期の局面を表す機能と意図や願望を表す機能を持っている。特に、自発的な行為 (spontaneous action) や性質を表す動詞に接尾された場合は、変化の初期の局面を表す (Nedjalkov & Otaina 2013: 135 を参照)。

(13) は TENSE が保持されている例であり、(14) の例では ASPECT が保持されている。一方、(15) と (16) は CASE と NB の名詞カテゴリをそれぞれ獲得している。*-k* によって派生された名詞に POS が標示されているのは、*əmək*「母」、*ətək*「父」、*əcik*「おばあさん」などの親族名称のみであり、他の派生名詞に POS が標示されている例は見られない。Panfilov (1962: 49-50) は、ニヴフ語には明らかに *-k* が接尾されて形成された親族名称があるが、それらはもはや派生語という感覚が失われていると述べており、同じ接尾辞による派生名詞の間にも語彙化の度合が異なることが窺われる。

3.3. *−dʲ* 名詞化

-dʲ 名詞化の脱範疇化と再範疇化の度合は次のとおりである。

(17) *-dʲ* 名詞化の脱範疇化と再範疇化

VALENCY >> VOICE >> ASPECT >> TENSE >> MOOD >> AGR_S >> IF

脱範疇化 >>>>>>>>>>> >>>>>>>>>>>>>>>

CASE >> POS >> NB

再範疇化 >>>>>>>>>>>>>>>

-dʲ 名詞化は、*-k* の場合と同様、VALENCY と ASPECT、TENSE の動詞カテゴリを保持し、すべての名詞カテゴリを獲得している。

(18) Nedjalkov & Otaina (2013: 217)

*Rum pʰi polm-**ijvu**-dʲ+sel-dʲ.*

Rum self be.blind-INCH/PROG-Dʲ+notice-IND

「ルムは自分 (の目) が見えなくなっていることに気付いた」

(19) Nedjalkov & Otaina(2013: 79)

*ɲi hədʲ+ɲrʰə-**nə**-dʲ+an-dʲ.*

I that.one+see-FUT-Dʲ+want-IND

「私はそれを見ることを望んでいる」

(20) Nedjalkov & Otaina(2013: 213)

*if ɲi it-c-**ɣu**+huiv-dʲ.*

s/he I say-Dʲ-PL+remember-Q

「彼は私が言ったことを覚えていた」

(21) Nedjalkov & Otaina (2013: 66)

*ɲi cʰəŋ+ɲrʰə-nə-dʲ-**ɣir** cʰajsa-t pʰrə-dʲ.*

I you.PL+see-FUT-Dʲ-INS wish-CVB.1SG come-IND

「私はあなたに会いたくて来た」

(18) と (19) では ASPECT と TENSE がそれぞれ保持されており、(20) と (21) では NB と CASE をそれぞれ獲得している。*-dʲ* によって派生された名詞が POS の名詞カテゴリを獲得している (7b) のような例は、比較的稀である。Nedjalkov & Otaina (2013: 69) は *-dʲ* 名詞化のうち、POS が標示され得る名詞化を完全名詞化 (full substantivisation) と呼んでいる。

4. 間接疑問表現

ここでは、ニヴフ語の名詞化における周辺的な問題として、間接疑問表現をとりあげる。ニヴフ語の間接疑問表現は疑問小辞 *-lu* を用いることによって表される。例えば、(22) のような表現である。

(22) Nedjalkov & Otaina (2013: 217)

ōla　*pʰ-əmək*　*vəŋir-dʲ-**lu**+ama-dʲ.*

child　REFL-mother　cook-Dʲ-Q+look-IND

「子供は自分の母が料理しているのか見た」

-lu は埋め込み節の出来事に関する不確実性を表すものであり、(22) に見るように埋め込み節の主要部が主節と統語的な複合体を形成していることから、名詞化されていると判断できる。しかしながら、次の例のように、表面上では名詞化されているかどうかがあいまいな場合がある。

(23) Nedjalkov & Otaina (2013: 209)

pət　*vi-nə-dʲ-**lu***　*j-a-nə-dʲ-**lu***　*metra-r*　*hum-dʲ.*

tomorrow　go-FUT-Dʲ-Q　3SG-what.to.do-FUT-Dʲ-Q　doubt-CVB.3SG　be-IND

「(彼は) 明日行くのかどうか疑っている」

(23) の *vi-nə-dʲ-lu* のような形式に関しては、直説法の動詞形式とみなすか、それとも名詞化されているとみなすかという二つの解釈があり得る。述語と統語的な複合体を形成していない点からすると、直説法の動詞形式として扱うことも考えられる。実際に、この理由から Nedjalkov & Otaina (2013) の編者は、このタイプを直説法の動詞形式とみなしている。しかしながら、筆者はこのような形式も名詞化されているとみなすべきであると考える。それには次のような理由があげられる。

まず、*-lu* が接尾されている埋め込み節は、上記の例に見るように「～かどうか」「するかしないか」といった対立する意味がペアを成して現れる場合が多いことに注目する必要がある。その際、もし片方が省略される場合は、残りの部分（多くの場合は前の部分）が述語と統語的な複合体を形成する。

(24) *jaŋ*　*morʰqa-d-**lu***　*jan-d-**lu***　*ɲi*　*j-aɣzu-d.*

s/he　be.alive-Dʲ-Q　how.to.be-Dʲ-Q　I　3SG-not.know-IND

「彼が生きているかどうか私は分からない」

(24)’ *jaŋ* *mor^{h}qa-d-**lu**+aɣzu-d.*
s/he be.alive-D^j-Q+not.know-IND
「(私は) 彼が生きているか (どうか) 分からない」

また、埋め込み節が副詞的な要素の修飾を受ける際には、その要素は一般的に間接疑問を表すペアの前に置かれる。間接疑問のペアは、通常は続けて現れ、間に別の要素が現れている例は見られない。筆者によるニヴフ語母語話者への聞き取り調査においても、例 (25a) は自然だが、副詞が間に入っている (25b) は不自然だと判断された。

(25) a. *jaŋ* ***maxtur^{h}kir^h*** *mor^{h}qa-d-**lu*** *jan-d-**lu*** *ɲi* *j-aɣzu-d.*
s/he really be.alive- D^j-Q how.to.be-D^j-Q I 3SG-not.know-IND

b. ? *jaŋ* *mor^{h}qa-d-**lu*** ***maxtur^{h}kir^h*** *jan-d-**lu*** *ɲi* *j-aɣzu-d.*
s/he be.alive-D^j-Q really how.to.be-D^j-Q I 3SG-not.know-IND
「彼が生きているか本当にどうか私は分からない」

このことは、間接疑問を表すペアの結びつきの強さを表しており、一つの統語的な単位を成していると考えられる。

5. おわりに

本稿では、ニヴフ語の接尾辞 *-f*、*-k* と*-d^j* による名詞化を Malchukov (2006) の脱範疇化/再範疇化の枠組みを用いてその名詞化の度合を検証し、名詞化の周辺的な問題として間接疑問表現をとりあげた。まず、名詞化の度合に関しては、次のような結果となった。

(26) 脱範疇化の度合

	VALENCY >> VOICE >> ASPECT >> TENSE >> MOOD >> AGR$_S$ >> IF
-f	>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>
-k	>>>>>>>>>> >>>>>>>>>>>>>>>>>>
-d^j	>>>>>>>>>> >>>>>>>>>>>>>>>>>>

(27) 再範疇化の度合

	CASE >> POS >> NB
-f	>>>>>>
-k	>>>>>>>>>>>>>>>>
-d^j	>>>>>>>>>>>>>>>>

脱範疇化においては、*-f*、*-k* と*-d^j* による名詞化で VALENCY、ASPECT、TENSE を保持している例が見られたが、VOICE を保持している例は *-f* 名詞化のみであった。一方、再範

疇化においては、*-f* 名詞化は CASE のみを獲得しており、*-k* と*-d*^{j} 名詞化はすべての名詞カテゴリを獲得している。この結果から、*-f* の名詞化の度合が *-k* と*-d*^{j} に比べて低いと言える。次に、(23) のような埋め込み節の間接疑問表現に関しては、ペアの一方が省略される場合に述語と統語的な複合体を形成する点や、副詞修飾・語順の制約の点から、問題の埋め込み節は名詞化されているものと考えられる。

今回の名詞化の度合に関する調査は、文法形式が明示的に標示されているかどうかを判断基準としており、ある文法形式の標示に見られる意味・統語的な偏りは考慮に入れていない。例えば、ニヴフ語の NB のカテゴリは、一般的に有情物の主語に現れやすい傾向があり、そもそも場所名詞に NB が標示されることは普通見られない (蔡 2014)。このように、それぞれの文法カテゴリに見られる分布上の制約も名詞化の度合の判断に影響を及ぼすことがあり、今後より綿密な調査を行う必要がある。

略号一覧

DES: desiderative 願望
DEST: destinative 到着点
DIMN: diminutive 指小
D^{j}: *-d*^{j} nominalization *-d*^{j} 名詞化
EP: epenthetic vowel 挿入母音
HS: hearsay 伝聞
INCH: inchoative 起動

参考文献

蔡 熙鏡 (2014)「ニヴフ語東サハリン方言の複数標識 *-gun* について」『北方人文研究』第 7 号, pp. 71-81. 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター.

Krejnovich, E. (1937) *Fonetika nivkhskogo (giliackogo) iazyka* [Nivkh phonetics]. Moscow and Leningrad: Uchpedgiz.

Malchukov, Andrej L. (2006). Constraining nominalization: function/form competition. *Linguistics* 44-5, 973-1009.

Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.

Nedjalkov, Vladimir P. & Galina A. Otaina (2013) *A Syntax of the Nivkh Language. The Amur Dialect*. Geniušiene, E.Š. & E. Gruzdeva (eds.). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Panfilov, V. (1962) *Grammatika nivkhskogo iazyka* [Nivkh grammar]1. Moscow and Leningrad: Nauka.

Savel'eva, V. i C. Taksami. (1970) *Nivkhsko-russkii slovar'*[Nivkh-Russian dictionary]. Moscow: Sovetskaia enciklopediia.

Shiraishi, H. (2010) *Topics in Nivkh phonology*. Dissertation at Groningen University. Saarbrücken: VDM Publishing.

丹菊逸治・ガリーナ パクリナ (2008)『V・サンギ採録ニヴフ語サハリン方言音声資料集(1)ーフトククさんの昔話と体験談ー』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Nominalization in Nivkh

Heekyung CHAE
Graduate student, Tokyo University of Foreign Studies / JSPS research fellow

The present study puts its focus on nominalization in Nivkh spoken on Sakhalin Island and in the Amur region of Russia. There are two strategies of nominalization in Nivkh. One is to attach the suffix *-s* ~ *-r*^{h}, *-f*, *-k* to a verbal stem. The other is to use the indicative form *-d*^{j} as an argument.

In this study, firstly, using Malchukov's (2006) decategorization and recategorization hierarchy, we examine the degree of decategorization and recategorization of Nivkh. Secondly, we will discuss a nominal status of the indirect question of Nivkh that still remains controversial.

The result from this study indicates that, there are significant differences between *-f* and *-k*, *-d*^{j} in the degree of recategorization. Furthermore, I argue that the indirect question of Nivkh can be considered as a nominal.